

狂犬病予防注射（集合注射）を受ける方へのお願い

- 犬は、必ずクサリ等でつなぎ、噛みつく癖のある犬には必ず口輪をしてください。
- しっかりと犬を抑えられる方が会場へお越しいただき、接種の際には犬を抑えてください。飼い主の方が犬を抑えれない場合は、注射をお断りします。**
- 飼い犬を車などに乗せたままでの接種は、集合注射の場合、他にお待ちいただいている方への迷惑、予定時刻の遅延になりますのでお断りいたします。
- 交付を受けた登録鑑札、予防注射済票は「狂犬病予防法」により飼い犬に付けることが義務付けられておりますので、首輪などに必ず付けるようにしてください。

◀ 接種の際は、下の写真のように、犬を抑えてください。 ▶

小型犬の場合



※右手で首を抱き抑える



※左手で後ろ足をしっかり抑える。

大型犬の場合



※首輪をしっかりつかみ、犬の頭を胸元に寄せるようにして抑える。

狂犬病とは・・・

◀ 狂犬病の現状 ▶

日本国内での、犬などを含めた狂犬病の発生例は、人では1956年、動物（猫）では1957年を最後に発生がありません（2006年に、海外で犬に咬まれ、帰国後発病し死亡した輸入症例あり、このような事例は1970年以降ぶりです。）。しかし狂犬病は、日本、イギリス、オーストラリア等の一部の国々（洗浄地域は島国が多い）を除いて、世界のほとんどの地域で依然として発生しています。

◀ 狂犬病とは ▶

人獣共通の伝染病で、犬・猫・人間は勿論のこと、ほぼ全ての哺乳類に感染する病気です。発症した動物に咬まれると、唾液を通じて高い確率で感染します。ウイルスが体内に侵入してから症状が出るまでの間を潜伏期間といい、犬で3～8週間、人で1～3ヶ月（平均1ヶ月）と言われております。潜伏期間の長さは、咬まれた部位から脳までの距離や侵入したウイルスの量によって異なりますが、発症すると動物でも人でも100%死亡すると言われており、発症してしまうと治療法はありません。世界保健機構の推計によると、世界では年間に5万9千人が亡くなり、このうちの40%は子どもと言われております。

◀ 治療方法 ▶

発症前の治療法としては、感染動物に咬まれた場合、発症前の潜伏期間中（直後から1ヶ月の間）に数回狂犬病のワクチンを接種し、発症を抑える方法があります。ただし、治療の開始が遅れたり、脳に近い部位を咬まれた場合には、この治療の効果が出る前に発症してしまうことがあります。

◀ 予防法 ▶

犬の前で急に逃げると追いかけて、咬みつかれることがありますので、急な動きをしないようにしましょう。海外旅行などで、狂犬病の発生国に行く場合には、事前に予防接種を受けることをお勧めします。犬や猫を見ると無防備にふれようとしがちですが、野犬や野生動物にはむやみに手を出さず、現地では動物との接触をなるべく避けるようにしましょう。